生きる場の思想

花崎　皋平
著述業

原田　公久枝
アーティスト

司会：番匠健一
広島国際学院大学情報文化学部准教授
立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

写真１　会場写真（左から番匠氏、花崎氏、原田氏）

本稿は、2022年6月4日（土）13時30分から16時まで、立命館大学末川記念会館にて対面およびZoom配信にて開催された、平和教育研究センターのメディア資料研究会特別講演会「生きる場の思想」の講演記録である。戦後日本社会における様々な反戦平和運動・文化について歴史的な再評価が進んでいるが、本企画では花崎皋平氏から、北海道におけるベトナム反戦運動への関りから伊達火力発電所・泊原発反対の地域住民運動、アイヌ民族の復権運動、アジアとの連帯運動への関りと、自身が歩いた風景や出会った人々の顔から見えてくる地平についてお話しいただいた。もう１人の講演者である原田公久枝氏はアイヌの歌と踊りのパフォーマンスアーティストであり、「生きづらさ」を抱えた人からみた「共生」への疑問をテーマにお話しいただいた。

＜登壇者とプロフィール＞

講師　花崎 皋平（はなざき こうへい）

1931年東京生まれ。北海道大学教員をへて、著述業。ベトナム反戦運動、伊達火力発電所・泊原発反対など地域住民運動、アイヌ民族の復権運動に関わる。1989年、ピープルズ・プラン21世紀国際民衆行事で世界先住民会議の運営事務局に参加。さっぽろ自由学校「遊」、ピープルズ・プラン研究所の創設にかかわる。主著として『田中正造と民衆思想の継承』（七つ森書館）、『詩集アイヌモシリの風に吹かれて』（クルーズ）、2022年に戦後から現在に至る精神史的歩みを『生きる場の思想と詩の日々』（藤田印刷エクセレントブックス）にまとめる。

講師　原田公久枝（はらだ きくえ）

1967年北海道河西郡芽室町生まれ。5歳の頃より、帯広カムイトゥウポ保存会にて祖母、加藤なみえ他にアイヌの歌と踊りを習う。現在パートをしながらアイヌの活動（歌・踊り・講演・執筆・お笑い）を行う主婦。アイヌの歌と踊りの姉妹ユニット・フンペシスターズのメンバー。さまざまな「生きづらさ」を抱える人たちの思いをつづる場として、フリーペーパー「RUYKA　ITAK（ルイカ　イタク）」を発刊。「おかあちゃんとおとおちゃんの話」『家族写真をめぐる私たちの歴史』所収（御茶の水書房）。

司会　番匠 健一（ばんしょう けんいち）
広島国際学院大学准教授、平和教育研究センターリサーチャー。専門は歴史社会学、平和学。

番匠：コロナ禍で、日常生活にも制限が続いています。先が見えない戦争のなか、私たちの行動や考えもどんどん切り縮められていっているように思います。これは奄美から沖縄にかけて自衛隊が基地をつくり米軍と共同軍事演習を行うなど目に見えやすい事態だけではなく、私たちの日常世界において戦争に向かう見えにくいプロセスが浸透していることでもあります。そんな中でこのお２人のお話を聞きたいと思って、京都に来ていただきました。立命館大学国際平和ミュージアムは現在リニューアル作業が進行中であり、平和に関する資料を展示のみならず、平和博物館と平和そのものの在り方が問われています。今まさに議論の渦中にある課題として、今日のお２人の話を受けたいと思っています。

１部　花崎皋平「「共生」をめぐって」

番匠：花崎さんを全く知らない学生の方々もいるので、講師の紹介をさせてください。花崎皋平さんは、1931 年生まれで、今年 2022 年で 91 歳になります。実はこの講演会の 10 日前に自宅の畑で転ばれて、お体が大変なときに無理を押して来ていただきました。1964 年から北海道にお住まいを移して、北大を辞められた後は文筆業をして暮らされています。ベトナム反戦運動、北海道の伊達火力発電所や泊原発の反対運動、様々な地域住民運動やアイヌの運動などに関わってこられました。現在は、札幌の自由学校「遊」で「花さんゼミ」というゼミナールを持っていらっしゃいます。私も北海道に行ったときには、単発で参加させていただいて刺激を受けました。３月には、釧路の藤田印刷エクセレントブックスから『生きる場の思想と詩の日々』という本を出版されました。これまで思想家・哲学者として知られた花崎さんが、これだけのところを歩いてきた、これだけの人と出会ってきたということが年代記的によく分かる本です。人や思想が、単に思想としてあるだけでなく、人と出会って、色々な場所を自分の足で歩くことによってつくられていくことが伝わってきます。それでは早速、花崎さんからお話をよろしくお願いします。

花崎：初めまして。花崎皋平と申します。今、ご紹介いただきましたように、この６月に 91 歳になるので、もうあとどのぐらい生きられるかと思っておりますが、最初に、現代のこととして私の遺言みたいなことを短く申し上げたいと思います。別に大げさに考えていただかなくていいんですけれども。

今、ロシアとウクライナの間で戦乱が起こっています。私としては、国家が力でもって普通の何も罪のない、関係のない人々を殺す戦争というものを両国とも止めてほしい、止めなければならないと思っています。ウクライナが攻め返していいということではないだろうと思うんですね。たとえウクライナに不利なことがこの後起こるにしても、戦争よりはましではないかという思いを強くしております。米国や NATO も武器を売るなという強い気持ちがあります。

私自身の命が短くなったときに、どうしてそういう気持ちを言うかといいますと、私は前の日本の戦争を経験した、もう数少ない世代の１人なんですね。太平洋戦争が終わった 1945 年には、14 歳の中学２年生です。いまだに戦争のことはありありと記憶しております。あの日本のした戦争は、今のウクライナ戦争から振り返ってみても、非常に無謀というか、広島・長崎、それから沖縄の民衆が皆殺しを味わった。それまで無条件降伏しなかった。こういう戦争をまた繰り返してはならないという、本当に強い思いがあります。

その歴史の印として今の憲法があり、非武装という立場を守ろうという誓いがあったわけです。この頃の日本の政治状況を見ていると、また武装して中国に対して立ち向かうという、私から言わせれば愚かな歴史を省みないことが今行われようとしている。私としては、国民として国を守るというような力に頼る考えでは駄目で、そうではなくて、ただの市民、人間として生活を守り、地域を守るという、そうい

う立場に立ってこそ未来が見えてくるというふうに思っております。そういう意味では、正しい戦争というのはないんだという信念を持ちたい。それが私の願いとして一番最初に申し上げたいことなのです。

ちょっとした私の経験に基づく作品ですが、今年になってから、「どうしても思い出してしまう」という詩を書きました。

どうしても思い出してしまう
1945年3月
爆撃機B29が　青空に爆音を響かせ
焼夷弾をばらまく
いまウクライナを見舞っている攻撃を見聞きして

小さな借家の20坪ばかりの庭に
防空壕を掘り　警報の鳴るたびにその中に入る
ヒュウルルー　ドン
あたりに落ちてくる焼夷弾
長さは3メートルぐらい 深さ20センチほど
今　ウクライナではもっと新式の砲撃だ

飢えの記憶も忘れがたい
私は14歳　母と2人で東京のはずれ
食べるものはほとんど全くなかった
さつまいもやかぼちゃの茎と葉だけの汁
栄養失調でやせ細っていた
唇のぐるりに黒いかさぶた
喉が乾き　何か食べても下痢

アメリカのアフガン攻撃のテレビを見ていたら
アフガンの少年の口に同じかさぶた
「あっ、あれは1945年の私だ」
本当の飢えを知っている世代
今　ウクライナに思いをはせながら思う
歴史は繰り返す
進歩しない

最後のところは嘆き節ですけれども、だからこそという思いで、いつもニュースなどを見ております。

「共生」ということのお話をしようと思います。私は、もちろん思想として大事だと思っておりますけれども、言葉に表現するだけでなく行為・行動ですね。何かをすることで表現しなければならないのが「共生」ではないかと思っております。今度の本にも書きましたけれども、その具体的な形として、歩行する、歩くということを1つの行為実践の方法としてきました。

もう1つは、現場に行ってみる。例えば沖縄の辺野古なら辺野古、水俣なら水俣に行ってみる。問題があるところに行ってみるということを大事にしてきました。いろんな文化に触れるときに分からないこと、知らないことがいっぱい出てくる。そういうときに、それを自分の解釈の中にはめ込んで理解しようとしないほうがいい。例えば、私はアイヌの人たちとの付き合いが長いですが、沙流川（シシリムカ）という川があります。この川はアイヌの人にとってはサケが秋になると山へ向かって上っていくもので、それが川だという定義があるとしたら、後に入ってきた和人は、川は山から海に向かって水が流れていくものに決まっているじゃないか、物を知らない、科学的でない野蛮な考え方というふうな決めつけをして、間違いだと解釈する。そういうことをやめたほうがいい。お互いに聞き合うということがあってしかるべきだと思うんですね。それには友達になるということ、対等の立場で、平等な感覚で話を聞いたりしたりするということです。

明治の頃の文明開化の本には、アイヌの人たちは文字を持たないから、野蛮人、未開人であり、対して日本人は高級で、文化を発達させていくべき立場であると書いてある。そういう一方的な考え方をやめるべきだというふうに思います。

文字を持たないといいますけれども、アイヌの人たちと付き合っていると、物の覚え方が違うんですよね。記憶力が優れている人がたくさんいます。そして事柄を伝えるのに文字じゃなくて、話を通じて伝える、そういう特徴があるわけです。それは1つの文化の特徴であって、それを決して一方的に遅れている、野蛮だと言うべきではない。そういう立場が必要だと思っております。

だから、そういう人たちと付き合う、例えばアイ

ヌ研究者たち――古い研究者が多いんですけれども――の立場というのは、情報源として相手に接する、情報を得るために話を聞く、研究のためにアイヌに近づく人が結構いて、アイヌの人たちが非常に苦しめられたことがあります。そうではなくて、相手の人格を尊重して、対話を通じてお互いに学び合うという関係を取るべきではないか、そういうふうに思うのです。

私は、中学から高校初年度に祖母が死んだことで、キリスト教との接点ができました。教会に通って、聖書を読んで、最近それが基礎にあったと思い返すようになりました。キリスト者平和の会という朝鮮戦争に反対するキリスト者のグループに入って、ビラをまいたり、街頭で話をしたり、それが最初の社会的な活動と言っていいと思います。学生でしたから、学生としてデモにも行くんですけれども、私としては、クリスチャン、キリスト者としての活動です。

当時、国鉄の脱線事故がありました。共産党、特に川崎の東芝の労働者たちのグループがやったとでっち上げた松川事件がありました。松川事件では労働者が10数名逮捕されて、1審はほとんどの人が死刑判決でした。その救援会の活動をやって、控訴審にも1人で出かけていったら控訴審も死刑判決だったんですね。その頃はまだ拘置所で面接ができたので、死刑判決を受けた被告に面接して話を聞いてきて、それが最初の頃の活動でした。後にこの人たちは無罪になるんですけれども、大きな事件でありました。

その前に、1950年に朝鮮戦争が起こるんですね。朝鮮戦争のときは大学の1年生。具体的な知識は何もないまま、戦争に対する反対だけが心にあったという状態で、これは勉強しなければいけないと思ったのが、社会的な問題の勉強の始まりです。

そして、そのうち北海道に住むようになって、北海道大学に職を得て、しばらくしたときにベトナム戦争が激しくなって、関西もそうですけれども「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）というグループができます。私は北海道の「ベトナムに平和を！市民連合」をつくり上げる1人になりました。

1969年になると、いわゆる大学闘争、紛争で全国の大学生が立ち上がって、大学に対して抗議をする。そのときに私は、大学当局は学生たちと話をすべきだというビラをまいて訴えましたが、結局それが実現せず、校舎の封鎖解除に抗議して数名が校舎に立て籠もって逮捕されて、裁判になりました。弁護士さんが、学内の説明をするために大学の先生に特別弁護人になって欲しいといい、3人が特別弁護人になったんです。私はその1人です。実際に法廷で学長を尋問したり、法廷活動をやったのは私1人でした。結局有罪判決が出て、実刑3年になったんですね。大学の建物の上階から下に火炎瓶を落としたのが建造物放火罪という重い罪名で起訴された。これは起訴猶予がつかない、5年以上死刑までの重い罪名です。それは何とかしなきゃということで弁護活動をやって、結局実刑は3年、刑務所に入っていたのは1年9か月ぐらいでしたけれども、そういう事件がありました。

ちょうど私、40歳だったんですね。大学にいることに、ちょっと居心地が悪くて、旧帝国大学の古いシステムにあまり合わなくて、ベトナム反戦運動に出会ったおかげで、ここで生き方を変えちゃおうと思ったんです。非常に無謀だったんですけれども、40歳で、今なら生き方を変える最後のチャンス、これを逃したら、もう大学の先生としてずっとやるしかないな。だけど、今変えるなら、何とかなるという思いで辞めてしまいました。

前後してベ平連運動をやっていて、同じくデモで公務執行妨害で捕まったアイヌの女性がいて、その人と仲よくなって、結局これはちまたで言えば、不倫ですけれども、その女性と一緒に暮らし始めてしまいました。その女性はアイヌの中でも今でも非常に鋭い感性を持った人で、私はその人にいろんなことを教わりました。むしろ厳しく教えられるというか。その人が札幌の若いウーマン・リブの女性たちと一緒に活動をするようになったものですから。その当時のリブの女たちは、それぞれ男のパートナーがいて、子育てをやりながら、リブ活動をし始めてたんですね。

北海道の女性たち、特にリブなんかをやる底辺の

女性たちというのは、非常に生活力があるんですね。元気があるし、自分たちの仲間だけでお産をするという活動がまずありました。例えば子育ての前に、自分たちで３人も４人も自主出産する。これは産婦人科のお医者さんに何かあったらどうすると恫喝されながらだけれども、自分たちだけでお産をして、仲間の男性が取り上げるのもやったりして。そういうことでお産にも付き合い、一緒に取り上げることから始めて、無認可の保育園も自分たちでつくって男も女も一緒に保育をする時代がありましたね。それこそ、くず屋とか、いろいろ廃棄物を処分する仕事をやったりしていました。

そこで私自身が鍛えられたとか、暮らしの在り方も教えられたことが非常に多くありました。どうやったら貧しくても暮らしていけるかということも、その女たちから学びました。そういう意味で、私にとってウーマン・リブというのは非常に大事な教えを受けたグループだったんですね。

それだけでは生活できませんから、生活のために翻訳業を始めました。当時は社会思想とか固い本でも初版3,000部ぐらい刷ってくれたので、そうすると、１年近くはそれで何とか食える、そういう暮らしを始めました。

当時、田中角栄の日本列島改造論で、北海道と沖縄を全国のエネルギー基地にして、北海道は石炭・火力、沖縄は石油備蓄基地を造る方針というので、反対運動が起こりました。特に北海道は、伊達の海岸の有珠というところに住んでいるアイヌの漁師の人たちが立ち上がったんですね。それを支援に行こうと、支援といっても半分、邪魔をしに行くようなものですけれども、行って泊めてもらって、そこでちょっと手伝ったりしながら、反対運動をする仲間に入れてもらいました。そこで初めて、日常生活の中で具体的に生きているアイヌの人たちと出会ったんですね。

その人たちが私にとっては非常に魅力があったんですね。どういう魅力があったかといいますと、自由な、自由という意味はアナーキーというか、あんまり色々なことに縛られない考え方をして、反対運動なんかも学生とか労働者のように隊列を組んで、わっしょい、わっしょいとはやらないんですね。みんなぶらぶらして、あいつがこっち行くなら俺はこっち行くと、それぞれ個人として動きながら反対する、運動をする。このほうが機動隊は困りましたね。学生たちは隊列で向かってくるので、それを食い止めればいいんだけれども、どこへ行って何をやるか分からないという、アイヌの人たちの戦い方に非常に惑わされたということがありました。

その地域の闘いのことをみんなに知らせるために冊子を作ろうというときに、地域の歴史を調べて、松浦武四郎という人に出会うんですね。北海道中を７回も歩いて地図を作った幕末の下級官吏です。その記録を見ていると、アイヌの人がたくさん出てくるんです。明治になって松浦武四郎が残した『近世蝦夷人物誌』という本があります。最初は発禁本でしたが、明治になって出すことができたものです。それはアイヌの中の人物をたくさん取り上げて、こういう人がいたと書いているんですが、その書き方が面白いんですね。漁のうまい人だけではなく、障害者の人で海に潜って仕事ができる人とか、おばあさん２人だけで川沿いに暮らしていて最低の貧乏な人とか。偉い人とか、有名な人、力のある人、能力のある人だけじゃなくて、障害者、貧しい人、それから親を大事にする人、そういう人物を取り上げて書いている珍しいものなんですね。それを読んで、ああ、これは大事な記録だと思って、本に書きました。

伊達火力の反対運動のなかで、電気料金を上げて発電所を建設するのに反対して電気料金の旧料金払いをやろうとしたんです。リブなんかの少数の仲間ですけれども、旧料金を積み立てて受け取れと交渉したんです。当時は北海道電力も強引で、冬の１月、２月にやったら、２月にアパートの電気を止められました。そうすると、北海道の２月でしょ。冷蔵庫は物を凍らせないためのもので、部屋の中のものは凍ってしまうんですよね。それからトイレが凍る。昔、アラジンといってた手提げの石油ストーブ１つで過ごすという、厳しいといえば本当に厳しかったですけれども、案外元気で、悲惨な暮らしという感じではありませんでした。小さい子がいるうちなど

は、旧料金払いをやらない友達のうちで洗濯をさせてもらったり、いろいろ助け合いがあったりして過ごしました。それも思い出せば、記憶に残る出来事です。

その後大きな出来事としては、1989年に北海道中心に、全国的な運動の一環として「世界先住民族会議」を開催しました。これは世界キリスト教協議会がスポンサーになって、北米、南米、太平洋諸国、東南アジア等々から80人の先住民族を招いたんです。80人というのは、当時としては大変な人数でした。そして札幌、平取町の二風谷、それから釧路湿原と3か所に連れていって会議と行事をやりながら最後にまとめをした、これは画期的な活動だったと思います。そこでまた世界の先住民から教わることが多かったですね。

最後に申しますけれども、先住民たちのスピリチュアリティ、スピリチュアリティというのは霊性ですね。それぞれの信仰、永遠なもの、科学では捉えられない思いというものを自然との交流の中で表現するという、それが全ての先住民に共通していました。毎日、開会のときに、例えば今日はアメリカの先住民、今日はブラジルの先住民、それぞれの人に代表になってもらって、その人の祈りの上げ方をみんなに伝えて一緒に祈るという、祈りから始まる会合だったんですね。そういう会合が持っている先進的なつながり合いというのがやはり非常に新鮮で、学ぶものがありました。

その後、いろいろな活動をしましたが、当時アジアを中心に国際的なネットワークをかなりつくっていまして、日本で行事を行うことがありました。その1つに、各国の開発の現場を、各国から1人ずつ人を選んでチームをつくって回って、それを報告するという活動がありました。それに私も日本から参加して、日本、フィリピン、韓国、タイ、マレーシアなど、そういう地域を回って、当時の工業開発の様子を労働者の泊まるところに泊めてもらいながら、歩きました。そうしてみると、開発というのはいかに貧富の差を激しくするものかというのがよく見えてきたように思いました。

思想の問題として、さっき松浦武四郎のことを申しましたが、その後に田中正造の思想に出会うんですね。晩年の3、4年、鉱毒事件が敗北に終わったあと、どうするかというときに、田中正造は渡良瀬川の治水活動を思い立って、歩くんですよ。川の支流の1つ1つを歩いて、記録しながら日記を書くんですね。その日記がすばらしい。そこで田中正造の精神、自然の霊性を感じて歩くという、その姿に非常に心を打たれて、田中正造の思想に強く引かれて、本を書きました。

一応終わりに、自分の思想の歩みを簡単に申したいと思います。私は17歳の頃にキリスト教に出会ったのが一番最初の思想との出会いなんですね。新・旧約聖書は、後から考えると、一番底に残ったなと思います。その後もずっと、キリスト教関係の本は読み続けてきました。南米の解放の神学、フィリピンの解放の神学、韓国の民衆神学等々、そういう神学関係の本は勉強よりも、自分の好みで読むということが多くて、そういう流れがあったのと、それからずっと後になりますが、韓国人のクリスチャンの女性と一緒に全国のハンセン病の療養所を歩くんですね。私は3か所を除いて全国のハンセン病の療養所を回ったんです。これは何で歩いたかというと、そこにいる人たちと出会って話をする、話を聞くというためです。それ以外何も特別なことはなかったんですが、その中で一緒に歩いた孫和代さんという在日の3世の韓国人の女性が、ハンセン病療養所にいる1人の在日韓国人の男性の聞き書きを本にしたんですね[1)]。この男性は文学者としても活動した人ですが、その人の本を作るのに力を尽くした。それを一緒に手伝ったというふうな、そういうキリスト教との付き合いがずっとありました。

それから、田中正造を知った後、それ以後の新しい近現代の日本の中の民衆の思想家に関心を持ちまして、それを学ぼうと思いました。例えば沖縄の人では、安里清信という石油備蓄基地反対運動をやった思想家。それから九州は人が豊富ですね。石牟礼道子さん、森崎和江さん、前田俊彦さん、そのほかにも民衆の思想家の源があると言ってもいいと思いますが、そういう人たちから学ぼうと思ってまいりました。

最後になりますが、そういう歩みの中で私が支えとしている、思想の柱というのを考えてみると、3つ挙げられるなと気がついたんですね。それは横文字言葉ですが、「サブシステンス」という言葉と、「ピープルネス」という言葉と、「スピリチュアリティ」という言葉、その3つの言葉に頼るというか、依拠するというようになりました。

「サブシステンス」というのは社会学の言葉で、この頃は「サブシステンス・フェミニズム」といって、フェミニズムの中からもそういう傾向が出ているんですけれども、これは沖縄の安里清信さんの言い方だと、生存基盤に根を張る、生存基盤にしっかり根を下ろすと、そういう立場を取ると、悠久の時間、古い昔から永遠の時間を感じ取り、過去と未来を生きる営みに接することができるという、そういう形で表現しているものなんですね。いかなる世になろうとも、底辺から住民としての永遠の存在にかけて生きる、そういう思想と表現されています。

私も非常に共鳴するものなのですが、20世紀の後半から21世紀にかけてのフェミニズムというのは非常に革命的な力がある思想だったと思うんです。ヨーロッパの優れたフェミニストは、アジアやラテンアメリカに基盤を置いてフェミニズムを論じているんですけれども、ドイツのマリア・ミースとか、インドのヴァンダナ・シヴァとか、そういう人たちがサブシステンスに基づくエコフェミニズムが大事だと言っている。その主張はアメリカの追いつけ追い越せというキャッチアップのフェミニズムではなくて、農業とか、食べるとか、育児、ケアする、それらの領域でのジェンダー差別をなくして、男も共通に関わるようにするという、そういう在り方、そういう暮らし方こそがアジアのなかから伝統に基づく大事な考え方を生かすものになるという、このフェミニズムというのが私は非常に大事だと思っております。

それから、「ピープルネス」というのは造語ですけれども、民衆同士が対等・平等、それから親しい親愛な関係をつくるという、そうする在り方ですね。そういうものとしての基本的な考え方です。

3番目の「スピリチュアリティ」は、いろんな宗教の教義に基づいて信仰を進めることは尊重しますけれども、それとは異なる精神的世界という、教義を持たない、だから宗教と言えるかどうか分からないんですけれども、自然を中心に永遠とか、そういうものの考え方ですね。スピリチュアリティとか、霊性とかいう立場だと思います。アイヌの人たちと付き合って、アイヌの人たちの信仰って、そういうものですね。狭義の教義はないんです。それから人格神というのも、人に例えても人格神としての教祖みたいな人はいない。自然のなかに魂とつながる尊さを見るという、そういう考え方ですね。そういうものを思う時代になったというわけなんです。

ちょうど時間になりました。これで一応終わらせていただきます。

番匠：花崎さん、ありがとうございました。（拍手）

まだ話し足りないことはあると思いますが、会場にいる皆さんとバトンを渡し合いながら対話といいますか、話したいと仰っていました。花崎さん自身も議論のほうが盛り上がると思いますので、後半戦に期待したいと思います。

2部　原田公久枝「タントアナクネピリカ　今日は良い日だ」

番匠：原田さんは1967年に北海道河西郡芽室町で生まれ、5歳の頃より帯広カムイトゥウポポ保存会にて祖母の加藤なみえさんなどからアイヌの歌と踊りを習われました。現在パートをしながらアイヌの活動（歌・踊り・講演・執筆・お笑い）を行う主婦であり、アイヌの歌と踊りの姉妹ユニット・フンペシスターズのメンバーとして活動されています。またさまざまな「生きづらさ」を抱える人たちの思いをつづる場として、フリーペーパー「RUYKA ITAK（ルイカ イタク）」を発刊するなど、マルチタレントとして活躍されています。それでは原田さんお願いします。（拍手）

原田：最初に歌おうかな。ノンノさんがさっき祈りから入るみたいなこと言ってたので、私は歌から入ります。今日の声の調子を見るという歌と「クテサ

ンナ」という歌です。「クテサンナ」は、アイヌの女性は、オオウバユリの根茎からでん粉を取るために根茎を取りに行くんですけれども、旦那さんが猟の支度をして、山を登っているわけです。旦那さんからは見えないんだけれども、そのまま行っちゃったら、熊と鉢合わせして危ないよという危急の声、危ないよという声が歌になったと言われている。2つを歌わせてもらってから話を始めます。声がすごくうるさいので、マイクはやめて、生声でやらせてもらいます。

『声出し』
アーアアアオー　アアンアエーロンンンン
アーアアアオー　アァアァアエローォンー

『クナサンテ』危急の声
クーテサーンナァ　ハ　ハ　ハウォー
ホイクーテサーンナァ　ハーァハウォオー
ハ　ハ　オーイー　ホイクーテサーンナァ
ハ　ハ　ハウォ　ハ　ハ　アウオー
ホイクーテサーンナァァ……

原田：ありがとうございます。（拍手）花崎皋平の「花」はアイヌ語で「ノンノ」なので、ノンノさんと呼んでいますけれども、ノンノさんと出会ったのは2009年ですね。7月に北海道の文学館でアイヌの展示をやっていて、そこで知里真志保先生の鳥の聞きなしという、鳥の声をまねしている録音を聞いていますと、後ろでおじさんが待っている。あっ、聞きたいんだなと思ってよけて、こっちには金田一京助さんと北海道曹達株式会社の社長の山田秀三先生と、それと萱野茂さんの声の録音があって、それを一生懸命聞いていると、さっきのおじさんが待っている。いやいや、さっき譲ったんだから、そこでゆっくり聞いてりゃいいのにと思いながらまた譲って、ほかのところを見て、鳥の聞きなしを聞いていると、おじさんが待っているということを何回か繰り返しました。そのおじさんのことを自由学校「遊」の七尾寿子さんが迎えにきたんですね。それで、「公久ちゃんは花さんご存じ？私と一緒に自由学校「遊」をつくったり、いろいろなことをやっている方で花崎皋平さんていうのよ」と言うから、知らんと言った。何かPMFのクラシックを聞きに来てたのよね。文学館が中島公園内にあるんだけれども、Kitaraという音楽ホールがあって、PMFって何ていうんだったっけ。

花崎：パシフィック・ミュージック・フェスティバル。

原田：パシフィック・ミュージック・フェスティバルの開場までKitaraの喫茶室でコーヒーでもいかがですかと言われて、コーヒーを一緒に飲んでいるときに、私はこういう者ですと出してきた名刺が花崎皋平しか書いてない。電話番号もなければ、住所もない。「どんだけ有名人か知らんけれども、連絡取りたいときはどうすんのよ」と言ったら、「あっ、これは失礼しました。僕は手紙を頂くのが好きなもので、裏に住所を書かせていただきますね」と住所を一生懸命書きながら、「でも、琉球とアイヌの人って手紙書かないんだよな」と言われてめっちゃ腹立った。「何でアイヌは手紙書かんとか決めつけられなきゃ駄目なの。帰ったらすぐ書いたるわ」と言って、めちゃめちゃ失礼な手紙をその日に書いて、すぐ出しました。

そしたら、何かそれがノンノさんにうけて、すぐに返事が来て、私もすぐまた返事を書いて、ペンパルになったわけですね。多いときには1週間に1通とか手紙をやり取りして、書くことがなくなって、日記のやり取りをするみたいになったんだね。

私は腰が痛くてもうしんどいって、毎回毎回手紙で愚痴っていたら、ノンノさんが、それこそ七尾寿子さんの旦那さんがある政党の議員さんで、その頃、会長だったんですね。ノンノさんが、「公久ちゃんが大変なんだ、何とかしてあげてくれ」と言ってくれて、それで政党の機関紙を配って集金するおばさんの後釜に、公久ちゃんどうだいってなった。私はその面接に行ったときに、「私、アイヌで、土日じゃないときもアイヌのことで講演したりして休まなきゃならんと。何なら海外に行くこともあって、1週間休まないかんときもあるし、普通には働けないかもしれないけれども、それでも雇うか」って

言ったら、向こうは、「そういう方を求めております。そういう方を応援する党でございますので、ぜひ海外に行ってください」という。おかげで私は今、月曜日から金曜日、10時から16時まで集金して配達さえしていれば、何しても怒られない。ちゃんとお金を納めて配っていれば、仕事して昼から喫茶店に行って、ずっと書き物しているとか、そういうことも許されてしまうという職場です。これ、どこかのテレビとかで流れないですよね。

番匠：今、インターネットで流れています。

原田：やばいね。そういうようなことで、手取りは12万でちょっと少ないなと思ったりもするんだけれど、こういうアイヌのイベントごとで休んでも文句を言われない。どうぞ頑張ってくださいと言ってくれるもんだで、ここで働かせてもらっている。ここで働けるようになったのは、この友達である花崎皋平さん、ノンノさんのおかげだということを皆さんにまずお知らせします。

私も、戦争は気になっています。この前、テレビでやっていた『ライフ・イズ・ビューティフル』を見ました。ユダヤ人の話ですが、戦争の影が濃くなってきて、お店に「ユダヤ人お断り」の貼り紙とかをされているんだけれども、お父さんがすごい明るい人で息子に何で「ユダヤ人お断り」って書いてあるのと聞かれたら、ここの人はユダヤ人が嫌いなんだよ。おまえは何が嫌いだいと言って、息子が僕はこれが嫌いだって言うと、じゃ、それはお断りとうちの店の前に書いておこうみたいな、すごい前向きな楽しいお父さん。最終的に店をやっているどころの話じゃなくなって、収容所に送られるときに子供が怖がらないように「これはゲームなんだ」と言う。「本当の戦車がもらえるゲームだから、ポイントをためるためには、すごく厳しいんだ」と言って、一生懸命、子供を怖がらせないように、まるで遊びのようにするという映画だったんです。最終的にお父さんは死んじゃうわけなんですけれども、その映画を見て、私はだんだん怖くなったんですよね。

今の情勢のままいって、第三次世界大戦とは言わないまでも、隣の国で戦争しているぐらいなんだから、もし日本でも戦争みたいなことになったときに、まことしやかにこの戦争ってアイヌのせいだと誰かが少しでも言ったりしたら。それこそ「ユダヤ人お断り」と書かれているように、「アイヌお断り」とか、「アイヌ死ね」とか、「アイヌどっか行け」とか書かれてしまうんじゃないのかなと。それでアイヌは収容所とかに行かされちゃって、自分で入る墓穴を掘らされて、汚れたからシャワーを浴びさせてあげるよといって部屋に押し込められて、ガスで20分以上もがき苦しんで、壁をかきむしって、爪がはがれて死んじゃうのかもしれないなということをありありと想像できてしまったんですね。

皆さん、アイスクリームというのが夏になったら出てきますよね、いろんな観光地でアイスクリームというのぼりがあるんですけれども、私たちアイヌというのは、そのアイスクリームというのぼりを見ると、ぎくっとするんです。私、あるイチャルパという先祖供養の場所で、下は8歳から上は80何歳の人にまで老若男女誰も問わず、「アイスクリームってぎくっとしない」って聞いたんです。そしたら、全員が「ぎくっとする」と答えた。アイまで見て、あっ、アイヌのこと書かれてないか、アイヌ帰れとか、アイヌ死ねとか、悪口を書かれているんじゃないべかと思ってしまうから、ぎくっとするという理由もみんな一緒だった。下は小学校低学年、上は80何歳のおばあちゃんまで、みんな同じことを言った。「ユダヤ人お断り」という貼り紙を見て、すぐにアイヌもそうなるんでないべかと考えてしまうのは、実はとっても悲しくて、恐ろしいことなんだなって思いました。

そして、今日はいい日だなと思ったから「タントアナクネピリカ（今日は良い日だ）」というタイトルにしたんだけれども、実はふだんは嫌なことが多いということの裏返しで、このタイトルをつけました。私は5年くらい前に今の職場で働き始めて、それまではスーパーのレジ、本屋のレジ、芋の選別、大根の選別、出荷の手伝いとか、バイトか、パートか、季節労働者としてしか働いていなくて、底辺にいるからいじめられるのかなって、ずっと思っていました。もっと上のほうに行ったら、頭いい人たちの中では私はいじめられないんでないべかと思いな

がら、そういう人たちに出会えないまま、そういうところで働けないままいたんだけれども。今の職場に行ったらびっくりしたんだけれども、月に2回新聞出して、月に1回500円ずつ集金する仕事なんだけれども、前の人は900人お客さんがいて、私になって3か月ぐらいで700人に減った。なぜかというと、アイヌが自分の机のそばに来るのは嫌なの。アイヌとお金のやり取りをしたときに、もし手を触られたら汚いから嫌、アイヌが触った機関紙を俺の机に置いてほしくないってはっきりと言う人はそんなにいないんだけれども、「分かるでしょ」と言われたり、部長さんがやめたら、課長も係長も機関紙をやめるみたいなことをされて、一気に900人から700人にお客さんが減ったんだね。

月に2回しか出していない新聞で500円取るということは、一般の人には頼みづらいから、係長以上の方に頼んでいるの。係長、課長、部長、局長、副市長、市長まで取ってくれている。つまり公務員試験を受かって、部下がいる係長以上の人たちは、そばにアイヌが来たら気持ち悪いから寄らないで、俺の机の周りをうろうろするな、おまえの手が触れたらどうしてくれるんだという。今まで底辺で生きていた私が、底辺の人たちと付き合っていたから、そうされていたんだなと思っていたのが、公務員試験を受かった頭いい人たちのところでも同じだぞ。あれっ私どこへ行っても逃げ場ないじゃんって、そのとき思ったのね。

それが現実というもので、そうやって言われたら、そうですか、今までありがとうございましたと言って帰る。というのはスーパーで私がレジでいると、ジョージア1本持ってきて、「おまえ、ここ触んなよ」って、「飲み口のところ、ここおまえが触ったら汚いから飲めなくなるんだからな」って。「98円頂戴します」と言ったら、100円ぱっと置かれて、その頃はコロナじゃないから、手から手へこうやってお渡しするのが正しい接客だったので、2円のお返しになりますと言って手に渡そうとすると、汚いねん、おまえの手からなんか取るか、「そこさ置け」って言われて。それで、はい、こちらにどうぞと言って、ありがとうございました、またどうぞお越しくださいませって言うまでが私の仕事だった。だから新聞配りのときもそうなんだなって思って、「今までありがとうございました、今後もお願いいたします」と言って引き下がったので、上の人たちは誰も私がそういう目に遭っているって知らなかったんだね。1年半後ぐらいにその話を飲み会のときにしちゃって、早く言えって怒られたんだけれども、その頃にはもう後の祭りで、お客さんががーんと減った。今でも私のことが嫌いで、そばに寄ってほしくないという人のそばには寄らないようにしながら仕事しています。だから座席表に、この人は要注意って、そばに寄ったら怒られるって書いています。

この前、北海道大学でガイドしたんだけれども、そのとき最後の質問で、私は原田さんが着物を着てガイドしてくださっているからアイヌって分かるんですけれども、ふだんの原田さんを見てアイヌだと思わないんですよねって。差別する人って、何でアイヌって分かるんですかって聞かれたから、分からないですと言ったの。差別する人たちは差別をしたいからなのか、アイヌセンサーってすごいのよね。

一昨日、ここに来るためにいろいろと仕事で配達しなきゃいけなくて、札幌の街なかをばたばた走っていたんだけれども、目の前から来た30歳くらいのお姉ちゃんから、通りすがりに私の顔を見ながら「気持ち悪」って言われたんですね。私、アイヌってことで気持ち悪いと言われているのか、もしくは私、もしかして一般の人から見て通りすがるだけで気持ち悪いような顔とか風体をしているんだろうかって、ちょっと悩んでしまって。びっくりしたのもあって、立ち止まった。明日京都に行かなきゃいけないから、早く仕事しなきゃと思って切り替えてやったけれども、今でも街なかで普通に気持ち悪いというふうに言われるのがアイヌというものです。

ここから共生の話をしようと思うんだけれども、去年の10月に京都の西京高校の生徒さんが修学旅行で北海道に来てくれました。北海道博物館の副館長の小川正人さんにお電話して、一緒にウポポイまで行って帰ってお勉強をしてくださるアイヌの方どなたか紹介してくださいって頼んだらしい。そうしたら小川さんが原田公久枝さんいいんじゃないです

かって推薦してくださったようです。西京高校の先生からの趣意説明とお願いという手紙に、原田さんのこれまでの活動を通して考えられる共生への道筋を話していただいて、全員で考えたいと書いてあったのね。その手紙を見て、ほほっと思って。当日、生徒たちへのお話に45分ぐらい時間いただいたんだけれども、アイヌはさ、150年前も今もさ、あんた方に「共生したい」って一言も言ってないんだけれども、何を上から目線で共生してあげるから、どうしたら共生できるのか教えてもらえませんかって言えるの。「私、共生したいって、おまえ方に言ったのか」って、まず言ったんだよね。そうしたら高校生だしびっくりしてしまって。共生するためには何をしたらいいんだろう、一緒に考えていきましょうみたいな講師の方がいらっしゃるとでも思っていたのか知らないんだけれども。150年前ってさ、北海道に食い詰めてなのか、悪いことしてなのか知らんけれども、北海道に和人と呼ばれるアイヌじゃない日本人の人たちが北海道に来たときに、新しい物好きで好奇心が旺盛なアイヌって、歓迎したと思う。そんな掘っ建て小屋だったら凍って死んじゃうよ、地面を1m掘って地熱を利用して家を建てなさいとか、食べる物はこれがあるよとか、しまいに置いていった子どもまでアイヌがアイヌの子供として育てたぐらいにして、すごい丁寧に接していたと思う。だけれども、アイヌにしてみても、この和人と呼ばれる見なれない人たちがずっとここに住むと思ってなかったと思う。

ところが、ずっと住むどころか、アイヌよりも数が多くなってきたら、何かアイヌのことを邪魔にし出して、場所請負制とか勝手に始めてくれて、アイヌを浜に下げて、ろくに飯も食わせないで、死んだら次、死んだら次って使い捨てにして、大人の男が死んじゃったら、今度は子供まで浜に下げて使って殺して、アイヌの女は強姦されて、そのショックで死んだり、梅毒をうつされて死んだりして、さんざん殺されてきた。共生するしないじゃなくて、殺されるから一緒に生きていかなきゃしょうがないという感じでいたのに、150年前ぐらいのほどではないにしても、私がさっき言った差別の話って、今現在、令和の世で起きていることで、それなのに共生するためにはどうすればいいんですかとか聞かれても、知らんでよって本当は言いたい。共生を言い出す前に、まずアイヌはそれを求めているんだろうかという考えにならないところが、この国のアイヌ問題の根深さを物語っていると思う。アイヌ問題という言い方も私は嫌いで、和人問題って言ってほしいなと、和人の人たちが考えるべきことを何でアイヌ問題って言うのと思います。

西京高校の生徒さんには、最後に、あなた方はきっと頭のいい高校の子だと思うから、もっと勉強して、どうしたらいいのかをおばちゃんに教えてくれないべかって。なぜかというと、私は学もなくて、中卒で、これから勉強しても絶対に到達できないと思うんだけれども、あなた方はもともと頭がいいから、もうちょびっとアイヌのことに興味を持って、共生についてもっと考えて、掘り下げていったら答えが出るんでないべかと。そしたら、おばちゃんに教えに来て。来なくてもいい、LINE交換するから、LINEで教えてって。ぜひお願いしますって頼んで別れたんだね。

その後、西京高校の娘さんが1人、私が帰るときに、もう目に涙をためながら、たったったってやってきて、今日は本当に考えさせられるお話をありがとうございましたと。ただ、私だけじゃなくみんなですが、原田さんにお会いする前に、作文も読んだし、RUYKA ITAKも読んだし、原田さんの刊行物には全部目を通して、もしもお会いできたら聞いてみたいなと思ったことがあるので、今聞いてもいいですかって言うから、どうぞと言ったら、原田さんは、どうしてそんなにさらけ出すことができるのですかって。そんなにさらけ出さなくてもいいのに、全てをさらけ出して、身を削って、自分の体を傷つけて話してくださるじゃないですか。それはどうしてなんですかって、ほぼ泣きながら聞かれて、ああ、それはね、私、公の人になったと思ったことがあったんだって。

私、中学1年生のときに「差別」という作文を書いて、それが釧路市の人権擁護委員会の作文コンクールで最優秀賞になって、それで新聞に載ったり

して、知里幸恵の再来とか、ウタリは差別に負けないとか、新聞紙面を躍らせた人なわけだね。それで、その作文をいろんなところに載せたいという人が後々現れるんだけれども、教科書にも載っているんだよね。昭和56年の中学3年生の公民の教科書に載っている。私、中卒で15歳で家を出て、三重県の松阪市の興和紡績というところに女工さんとして行った。子供心に中卒で働くのは厳しいなと思ったから。夜働けば昼間は学校に行ける。夜学校に行けば昼間働くという、交代制で勉強できるというから、そこさ行ったんだけれども。たまにコレクトコール、若い人は知らんわな、公衆電話で10円入れて、うちの電話番号を言うと、向こうが電話賃を払ってくれてしゃべれるんだね。ほいで、お母ちゃんにコレクトコールで電話したら、お母ちゃんが、何か知らんけれども、おまえの作文ば使いたいってなって。謝金はどうするんだとか、権利をどうのとかな、難しい話ばっかりするんだって。

うちのお母ちゃんって文盲で、字が読めないの。なぜかというと、5歳の頃から子守奉公にいって、5歳の子が子守奉公っておかしい話なんだけれども、農家さんの子供ばおんぶして、家の中のこととか、茶碗洗いとか、掃除とかから始まって、ちょっと大きくなると、畑さ出されて、そういう仕事してたのね。お金になる仕事でもなくて、やっとその日のご飯を食べさせてもらうだけの奉公なんだけれども、それでもアイヌの家では口減らしで、自分んちで食べさせなくて済むから、そういうふうにして子供ば外に働かせに行ったもんだ。お母ちゃんはその子守奉公ばっかりしてて、学校さ行ったことがないから、行ったところでいじめられるし、面倒くさいしといって行かなかったんだけれども、字が読めないし、難しいことを言われたら、もう本当に思考停止状態になるから、何言ってるか分からないってなるから、嫌なんだって。おまえの作文がどうのって電話来るって怒られたから、したら、あの作文はもう私、公のものになったと思うんだって。公久枝の公って公と書くんだ。だから公の人になっちゃったから、もう謝金がどうとか、権利がどうとか、どこの本さ載せるとか、何に使うとか何も言わんでいいから、作文って言われたら、使え、使え、何にでも使えって言え。だから、私は今でもどの本とか、何に私の作文が載っているかは知らない。なぜかというと、何にでも使えって言っちゃったから。なので、あるとき勉強のために買った本に、あら、私の作文、載ってるわってことがあって、びっくりすることがあった。でも、それは面白いからいいなと思っている。だから、そのときから公の人になっていると思うので、全部しゃべっちゃったほうが楽なんです。

本当は今の職場からしてみると、私がこんなところでこんな話をしているのはよろしくないことだと思うよ。あと役所の偉い人なのにアイヌがそばに来てほしくないとか言い出す人が、こういう講演を見たら、きっと私、帰って、怒られるんだろうなと思う。何でも言っちゃったほうが楽じゃないって思うのは、実は、私がアイヌだからかもしれないのよね。

アイヌって、なぜか自分語りをさせられるんだ。これまでの経験を、公久ちゃんの思うように話してくださいみたいな、これがめちゃめちゃ多くて。珍しいことだと思う。みんなお金をもらって、自分の体験をそのまま話してもらっていいですかって呼ばれたことがあるかな。ないよね。私、別にアイヌの中の有名人ではないんだ。もっと有名なアイヌいっぱいいて、あと顔がよかったり、歌がうまかったり、音楽ができたりという、有名人はもっといっぱいいるんだけれども、講演で呼ばれる確率で言うと、私がめちゃめちゃ多いんだよね。というのは、何かぶっちゃけちゃうからだと思うんだよね。他の人、そんなにぶっちゃけない。つらいし。自分がつらかった話とかし始めたら、泣いちゃうじゃん。人前で泣くの嫌だしというんだよね。

私は、こういう講演、九州大学でも、北大でも、慶應でも、阪大でも呼ばれて、そこら辺の幼稚園とかに呼ばれたときも、絶対これだけはしないって決めているのが、泣きながらしゃべること。お涙頂戴で、アイヌは今でもかわいそうだと思われるのが一番嫌で、絶対何があっても泣かないって決めている。客が泣けばいいと思っている。聞きに来た生徒さんが、こんな話を笑いながらしているなんてという裏を読んで泣き始めればいいなと思ってしゃべってい

る。つまり意地悪なんだけれども、でもそういう意地悪な考えに思いがいってしまうぐらい、アイヌは嫌な思いをしてきたんだよということをちゃんと分かってもらうために、にこにこ笑いながら毒を吐くということをよくやっております。

今はやっているのね、共生ってね。共生学会というのが大学でできたんだってね。ノンノさん、どっかでしゃべったんだっけ。

花崎：大阪大学。

原田：大阪大学で共生学会という学会が立ち上がったんだって。それで、学会を立ち上げるのはいいよ。共生という言葉から考え始めるのもいいのかもしれないけれども、相手が共生を求めているのかどうかをまず考えて、考えた上で、その人たちの意見も聞いた上で共生するためにはどうしたらいいんだろうかって、おまえら頭のいい人たちが考えて教えてくれねえかというのが私の結論なんだね。だって、もう私、55歳なんだもん。40歳からこのアイヌ業界に戻ってきて、15年間、自分なりに細々と勉強はしてきたけれども、アイヌのことですらまだまだ何も知らないことが多いのに、今から共生について考えて、論文を書けと言われても無理だし。とすると、頭のいい、学会とかつくっちゃう人たちにさっさと答えを教えてもらえないかなと思っている。そのために立ち上げてくれたんじゃないのかなと思っているので、ぜひ皆さんも、この中にきっと頭いい人がいっぱいいると思うので、共生について分かったことがあったら、私、LINEでも何でも交換するし、住所でも何でも教えるので、こんなことが分かったよって教えてほしい。そうしたら、私、それをまたひっ提げてどこかに講演に行くから、お願いします。ありがとうございます。（拍手）

番匠：原田さん、ありがとうございました。最初の歌からすごい展開でしたけれども、会場の中には、お2人のお友達で今日のためにわざわざ来た方もいらっしゃると思いますので、休憩時間に旧交を温めてください。

3部　対話

番匠：それでは、後半を始めます。質問がそれぞれ2つ来ています。公久ちゃんからですが、札幌市の職員のアイヌに関する意識の話がありましたが、市役所のエントランスホールに行くと開拓に貢献した和人を紹介する展示があるのに、アイヌに関する説明とか展示が一切なかった。アイヌ施策推進法があるのにこんな状態かと驚いたということです。このアイヌに関する和人の意識は、札幌だからなのか、札幌と道内のほかの地域とか、あるいは道外と差があるのか、何かそういうのを感じられたことはありますかという質問です。

原田：札幌だからこそなのかということなんだけれども、どこでも差別はされます。函館にいようとも、地元の帯広、根室にいようとも、釧路に行こうとも、どこに行っても差別はされております。セブンイレブンで立ち読みしていたら、ばーんって大型のトラックが止まって、運ちゃんが入ってきます。店内には私と、その運ちゃんと、コンビニの店員のお兄ちゃんしかいません。大型の運ちゃんがずかずかずかって店員のところに行って、「おい、おまえ、何、アイヌに立ち読みさせてんだよ。俺が読みたい本があいつ触ってたらどうしてくれるんだ」って言うわけですね。それで私があっと思って、その店員は私としゃべるぐらいちょっと仲よし。私がいつもそのコンビニに行くから、少ししゃべるぐらいの仲よしだったのに、「そうなんすよね、うちも困っちゃうんですよね」って言うんです。私は読んでいた本を片づけて、何も言わないで出て行って、そのコンビニには一生行かない、ということがあります。そういうことはもう日常茶飯事というか、よくあることで、一々傷ついていられないぐらいよくあることです。

内地に、本州に住んでいたことがあるんですけれども、そのときにはアイヌを知らな過ぎて、フィリピン人と間違えられます。フィリピーナの方にタガログ語でしゃべりかけられることはあるものの、アイヌと名指されることはないので、だから北海道よりは少しは過ごしやすくなります。外国人とめっ

ちゃ間違えられるけれども、アイヌって名指される、指さされるということはないので、本州のほうが少し過ごしやすいと思います。

番匠：次は花崎さんに質問です。サブシステンスという考え方、すごく大事だとおっしゃられたんですが、今、サステナブルという言葉がはやっていて、それと重なる面とずれる面があると思いますが、どうお考えですかという質問です。

花崎：ちょっと難しいけれども、サブシステンスの方がより原理的なんですね。語源はラテン語で、サブシステレ。サブは下とか大地とか、そういう下に、支えられているという、だから語源からいっても原理的ですけれども、日本語訳はこれまで生存と訳されますが、必ずしもぴったりではない。というのは、従来の古い社会学では、サブシステンスというのは、生きるにぎりぎりの非常に貧しいような生き方、生存しかできない、そういう否定的な意味が含まれた言葉でした。それが今はちょっと変わってきていますけれども、でも生存というだけではよく分からない、もう少し具体的でないと困ると思っているんです。

そして、サステナブルというのは、維持するとか、支持するとか、長続きするとか、そういう言葉ですから、こちらは時間軸が入っていて、そして時間の経過とともに変わらずに何か大事なものが残されていくという、そういう流れのニュアンスがある言葉なんですね。そういう違いがあると思います。

番匠：SDGs はいろんなところで言われていて、SDGs の中にゆるっとした共生みたいなのが入っているので、身近な分かりやすい例で提示されていることが多いですけど、花崎さんがやっていることはかなり違うんじゃないかと思いますが、どうですか。

花崎：今、さっぽろ自由学校という市民が運営している勉強の場があって、事務局長の小泉雅弘という非常に優秀な人がいます。その人が札幌市とか、行政の SDGs の活動も一緒にやっているんですね。そうすると、かなり緩いというか、甘いというか、企業なんかも入った形になっているので、そこはあるところでは一緒にやるけれども、あるところではきちっと区別するという、そういう分け方が SDGs の場合には必要になってくるような感じを持っています。

番匠：今日のお話でも共生といったときに、実践や行為で示すことがすごく大事で、そこの上で物すごい違いが出てくるという。

花崎：そうですね。

番匠：今の話、公久ちゃんのほうにも関わると思いますけれども、ウポポイでのガイドの話をされていました。私、ウポポイになってからは行ったことはないですが、その前のポロトコタンには行きまして、白老町の美しい湖の横に銭湯があって、自然公園があって、自転車で森の中を走り回ったり、アイヌ音楽のイベントなど記憶に残っています。公久ちゃんは、共生ってアイヌから言ったものじゃないとおっしゃったけど、今、民族共生象徴空間になったことはどう思いますか。

原田：どうかというと、ざっくりし過ぎて、私が答えていいか分からないので、スガちゃんにでも聞いたらと思ったりするけれども。アイヌからすると何か頭に来ている人は多いみたい。私としては、頭に来て文句言うなら、早くから動いていたことなので、アイヌにまで下がってこない情報はあるけれども、もうちょい早めにアンテナを高くして、止められるときに文句を言えばよかったのにと思います。私は、できてしまうならアイヌにとっていいものにしたいと思うので、うまく活用する方法を考えていくほうが得策だと思います。国がアイヌのことをしてくれるという大義名分が整っているわけですから、どんどん意見を言って、自分たちのいいように使えるようにする。使うためには、でも、声の大きい人にならなきゃ駄目で、ある程度偉い人にならなきゃ駄目なわけで、そのためには私は、自分のことをちょうどいい場所にいるかもしれないと思っている。こういうふうにしてと、それこそウポポイの人に言ってもしょうがない。あの人たちは使われている下っ端役人だから。そうじゃなくて、国に申せるところに私は行きたいなと思っています。言う前に死んじゃうかもしれないけれども。私ももう 55 歳だからね。

番匠：ありがとうございます。さっき花崎さんがさっぽろ自由学校の話をされましたが、京都も自由

学校がありまして、質問が来ています。ご本人から、いいですか。

米田量（京都自由学校スタッフ）：僕は何年か京都自由学校のスタッフをさせてもらいました。京都自由学校は設立当初は社会問題を考える講座が多かったです。けれども、趣味的な講座が増えてきて、さらにスタッフも動ける人が減って、ほぼ死に体のようになってしまいました。歴史的な成り立ちはベ平連からというようなことも、必ずしもスタッフで受け継がれていなくて、社会と対峙するような興味関心もないみたいな感じに最終的にはなっていた気がします。

先ほど、さっぽろ自由学校のお話をされましたが、市民の学びの場として必要なことは何であると思われますか。僕の感じだと、一人一人の人は消費者化して、活動する人とか、社会に問題意識を持つ人というのは変わった人として敬遠されるみたいな感じがあります。不特定多数の人を対象とする学びに自分はあんまり意味を感じなくなっています。学びを教養の獲得ではなく、自分事の展開とする転換が必要なのではないかと思ったりしているんですけれども。

花崎：さっぽろ自由学校は今年で32年目です。1990年に先ほどお話した世界先住民族会議の後に、そのスタッフだった有志が1回限りにせず、これからも札幌の地にそういう先住民族会議で語られたようなことを講座の形で引き継いでいく場所をつくりたい、という経緯でつくりました。

その伝統は今も生きていまして、今日まで毎年4つか5つのアイヌ史、アイヌ文化の講座をやっています。自由学校は、あんまり大学の先生は呼ばなくてですね。アイヌ講座も研究者ではなくて、この原田公久枝さんみたいな実際のことをやっている人に講師になってもらっています。今日でも来る人が多い講座になっていて、そういうところがあるのは北海道の中で唯一なんです。北大に先住民研究センターがありますが、これは市民に開かれてはいないんです。行政は何もやっていませんから、そういう意味では非常に大事な講座になっています。

それ以外に人権とか、札幌市のいろいろな行政に注文をつけたりする講座とか、手仕事、アイヌの刺しゅうの講座とかもありますし、語学（英語、韓国語）もありますし、1年間、日曜を除いてほぼ毎晩講座がつくられているんです。少ない講座の受講生は10人ぐらいですけれども、多い講座で3、40人は来るような流れで、これを維持できているのは、スタッフと、それを支える当初からの人たちがいるからです。事務局長の小泉さんという人が、私が思うに名事務局長なんですね。本当に30年間これ一筋に運営してきてくれて、その努力があればこそです。私としては、この自由学校というのは、京都や他にもあるんですけれども、北海道が一番優れているんじゃないかと、そういう自慢をするぐらいの大事な活動の場になっています。私はずっと読書ゼミを続けております。

米田：ありがとうございます。立ち上がりから先住民族の集まりということで、何か京都自由学校よりも花崎さんのいうサブシステンスに通じるものを最初から持っていたという印象を受けました。ありがとうございます。

花崎：それと同時に、最初は行政側から、あそこは左ってかなり警戒されていたんですけれども、だんだん向こうが変わってきて、行政の側も話を聞いてくれるようになりつつあります。

番匠：Zoomのほうで村上潔さんから、サブシステンス、生存維持経済という略語もありますねというコメントがありました。もう1枚、ピンポイントな質問ですけれども、箕田哲久さんから、よろしければご自身でおっしゃっていただいて、いいですか。

箕田哲久（兵庫県立湊川高校教員）：兵庫県立湊川高校の夜間定時制高校の教員をやっております。兵庫県淡路島から明治時代以降、多くの人々が北海道静内地方に移住した歴史があります。そこはアイヌの人々がもともと住んでいたところで、それぞれのコミュニティーがあると聞いております。アイヌの人々と移住した淡路島の人々ですけれども、中にはダブルで生まれた方なんかを見ると、アイヌ民族解放運動で活動をしていた秋田春蔵さんという方がいて、亡くなられたと聞いておりますが、淡路島の郷土史で見たことがあります。兵庫県で人権課題を語

るときにアイヌを避けて通れないと思うんですけれども、解放教育、人権教育の集会、それから人権関係の運動をやっている集会とかで語られたことがないんです。毎年提案はしているんですけれども、一向に進まない状況かなと個人的には思っています。唯一、淡路島の高校が北海道に修学旅行に行ったり、交流しているということはあります。

もう１つ、花崎さんから松下竜一の話があったんですけれども、豊前火力発電所差止め訴訟に関わった７人のうちの２人の先生から、僕は高校時代に習って、その人は部落解放研究会の顧問とか、同和教育推進教員とか、社会科の先生をやっていた先生でした。ちょっと懐かしいなと思って拝聴していました。

花崎：ああ、そうですか。淡路島と静内との関係ですけれども、これは池澤夏樹さんに『静かな大地』という大きな小説があります。池澤さんの先祖が四国から静内に入植した人なんですね。とても面白い小説で、先祖の物語を小説に書いて、最後が静内の武士出身の若者とアイヌの女性が恋に落ちるというふうになっていたんですね。もともと新聞小説で、それを読んでいたときに、いや、ちょっとまずいなと私は思った。何でかと言うと、これまでの小説では和人の男性とアイヌの女性の恋愛は必ずアイヌの娘が悲しい目に遭うと決まって書かれていたので、そうなっては困るなと思って、後で作者に直接聞いたんですね。そしたら、開拓に来た者がそんなふうにいい目を見て、アイヌの女性が悲しむ悲劇の物語だけにはしたくなかったんだよと言われて、いや、それはいいなと思いました。静内のアイヌの側からの情報はかなり取材しているんですけれども、ちょっと足りないかなという気はしました。小説としてはなかなかいいものだったと思います。

番匠：対話形式で話を進めていきたいので、ちょっとマイクを持ってお話ししたいよという方、どうぞお手を挙げていただければ、スタッフがマイクを持って駆けつけていただけると思いますので。

寮美千子：公久ちゃんがそんなにひどい目に遭ったということを聞くと、本当に胸が、どうしてそんなことをするんだろうと感じます。関西のほうは少し気が楽というのは、みんながそれを知らないからということであって、じゃ、みんなが知らなくなればいいのかというと、それはまた違う。知らないがゆえにその文化を理解しなくて、結果的にその人の生き方や考え方を否定するという形の差別もあると思うんですね。知っていて、あえて差別する人と、知らないから知らないうちに差別しちゃう人と。後者は学びの機会が１つでも多くあれば、変わっていくと思うんですよ。あっ、世の人はこういう考え方をするんだ、こういうふうな人付き合いがあるんだと。だけど、知っていて差別する人は、一体どういうことか、私には理解できないんですけれども、公久ちゃんも、それから花崎先生も、人の差別の根源をどうお考えになるかを聞いてみたいと思いました。

原田：差別は、アイヌだからされているんじゃないということは分かっています。学校のいじめを見たら分かりますね。アイヌ民族だからいじめられて、旭川のあの子も死んだわけじゃありません。あの旭川で死んだ子はめんこかったよね。本当にちゃんと生きている子供だっただけなのに、たまたま標的になるんですね。私は、いじめというものは一生なくならないと思っていて、人が成長する過程で、そういうことをしてしまうものなんだとしか思えない。

私がこれだけいじめられるプロとして考えるのは、中学校１年生のときに私が作文を書いて、アイヌ協会の総会に呼ばれて行ったときに、看護師をやっているかなり頭のいいドイツ語もしゃべれるアイヌのおばさんがいたんだけれども、そのおばさんが、いや、アイヌにもこうやって自分のことを語れる、ちゃんと堂々と書ける子が出てきた。アイヌは安泰だわって泣いたから、「おばさんって、昔いじめられなかったの」って聞いた。「いじめられたよ」って、「じゃ、今はって」聞いたら、「いじめられてるよ」って。「私も今いじめられてるんだけど、おばさんと同じように私、50年後もいじめられてると思うの」と言ったら、この子をそんな考えにしてしまったのは私たちのせいなんだわって泣いてた。人間はみんな差別するものなんだと私は思っていて、それをどうするのかというと、「出会い直し」という言葉を文化人類学者から聞いた。大体の人って、

アイヌって汚くて、臭くて、だらしなくて、酒飲みで、頭の悪い人と思っている人が多い。昔は本当にそうだった。働くところがなくて、底辺に生きていて、酒に逃げて、仕事も休んじゃったりとかして、汚い格好をして、しかも毛深いし、風呂に入ったって何か臭うし、みんなと違うんだよね、その体臭の感じとかもね。

17歳のときに、18歳だとうそを言って、私、パチンコ屋さんに潜り込んで働きに行ったんだね。アイヌが来やがったって、そこの主任からいじめられたわけ。うちの社長、何考えてんだアイヌなんか雇いやがって、俺の部下にするなんて嫌だって言って、めっちゃいじめられたの。私は、この人はアイヌって汚いと思っているんだなって思ったから、汚くないし、ちゃんとしてるし、一生懸命働くよというところを見せたくて、めちゃめちゃ頑張って働いたの。みんながやりたがらないトイレ掃除も自ら進んでやるし、ふだんの仕事もマイクパフォーマンスもじゃんじゃんばりばりってやってたし、明るくて、ええ子やって分かってもらおうと思って。

そしたら、1年後にちょっとおかんからお金も入れないで、ずっと家にいられたら困るから、どっか出て行ってと言われて、パチンコ屋を辞めることになって、主任に言ったらお別れ会を主任が自分のお金で払ってやってくれた。はなむけの言葉でも、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、俺は最初、アイヌが入ってきたとき嫌だったって。公久のこと嫌で嫌で、いつでも追い出してやろうと思っていたのに、働き始めたら、すごい明るくていいやつだし、誰よりも一生懸命働いてくれた。ただ、おまえは遅刻癖があるから、朝起きられないというのがあるから、それだけがこれから社会で生きていく上で心配だから、大きい音が鳴る目覚まし時計を買ったって、何か6,000円ぐらいする目覚まし時計を私のために買って用意してくれた。俺は今までアイヌのことを誤解していた、公久に会えてよかった。アイヌにも、日本人にもなんだけれども、当たり前なんだけれども、アイヌにもいい人がいる。でも、アイヌにもだらしない人もいる。ただ、俺はだらしない人しか見ていなかったけれども、こうやってちゃんとしているアイヌもいるということを公久によって教えてもらって、公久に会えてよかった。これから頑張れよって、その6,000円の目覚まし時計をくれながら、泣きながら挨拶してくれた。そうやって出会い直しをしてもらうためにも、私はこういうところでまあまあ毒舌を吐いたりするけれども、最終的にはいい人と思われるように、みんなにアイヌっていい人だねって、めちゃめちゃ演技しています。私、ほかのアイヌのことは知らないけれども、私、まあまあいい人だよって思われるように、出会い直してもらうために。

花崎：公久ちゃん、今もう55歳ですが、今の20代ぐらいの若いアイヌの、特に都会に住む人たちは、自由学校「遊」でも話をしてもらうんですけれども、差別されたことはありませんという、結構そういう人が増えてきています。それはやっぱり和人側の目が変わってきたんだというところもあるわけですね。それまでは北海道に住む和人というのは、さっきの公久ちゃんの話じゃないけれども、見ただけで、あっ、これはアイヌだって見分ける勘みたいなのが働くんですね。だから、それで差別意識を持っている人は、あっ、嫌だとか、あっ、こいつはアイヌだとか決めつけるというか、そういう傾向があったんですけれども、最近はそれはあまりいなくなってきたよね。

原田：どうなんだろう。

花崎：どうなんだろうと言っていますけれども、ちょっと変化はあると思います。

寮美千子：公久ちゃんがいい人を演じていますというお話をしたけれども、私は少年刑務所で10年間ぐらい、犯罪を犯した少年たちに絵本と詩の教室を持ってたんです。その子たちは悪いことをしたし、罪の償いをして出て行ったときに、やっぱり前科者で差別されまくるわけですよ。だって、その人たち、悪いことしたから、しようがないじゃんというふうに言う人もいる。それから、障害者もそういう意味では、人並みには働けなかったり、いい人になれなかったりすることっていっぱいあるじゃないですか。だから差別されて当たり前みたいな考え方もあるけれども、それはやっぱりおかしいんじゃないかと思

います。どんなに酒飲みだろうが、みんなと一緒に同じことができなかろうが、それでも仲間として生きていくんだよというような視点を多数派の側がやはり１人でも多く持つことが大切です。そのためには一体何ができるだろうということを考えて、わたしの事務所「れんぞ」で毎月、30名規模の勉強会をやってきました。コロナになって現在は休止中ですが、公久ちゃんたちアイヌ民族の方を始め、いろんな人に講師をしてもらいました。刑務所に８回行った人や、福祉施設を作った人や、保護観察所長や、刑務所の教官など。元受刑者も、生活保護を受けている人も、大学の先生も、みんなが平場で話せるような交流の場ができたのはうれしかったです。こういう場を１回でも多く持てたらいいなと思っています。コロナが終わって、公久ちゃんたちにもまた来ていただきたいなと思っています。（注：2023年現在、奈良市に「古書バルぽらん」という８名ほど集まれる場所を作り、小規模ですが勉強会を再開しています。）

質問者：私、北海道出身で、もう京都に50数年住んでいます。今のアイヌ差別について、私は鈍感だと思うけれども、恐らく積極的に社会に関わっていなかったということもあると思うんだけれども、あまり感じなかった記憶があります。それから、僕は逆に驚いたのは、こちらに来て部落差別の問題ね。これ逆に、北海道に住んでいたから、何でこんなことが起きるのか全く理解できませんでした。島崎藤村の『破戒』とか、そんなことが何で起きるんだろうと。私は、そういう女の人がいたら、積極的に結婚してやろうと、そんなつもりでいたんだけれども、でもこちらに来て働いていると、同和教育をきちんとやっているから、表向きに言うことはないんだけれども、裏の世界ではもう完全にそういうことを言われ続けていて、あっ、これがそうなんだなという感じは受けました。

だから、アイヌ差別の問題も、私は積極的に関わっていなかったから、知らなかっただけであって、恐らくアイヌ差別はある意味では外面的なものがあるでしょう。でも、部落差別って見たって分からないでしょ。でも例えば住んでいる場所とか、そういうことで想定されてくると明らかになってくる。だから、差別の問題というのは、教育の問題と、それから今、出会い直しという話があったけれども、やっぱりそれは差別する側がそういうことを考えなくちゃいけないですね。

それから、私、1968年から９年ぐらい、札幌のベ平連のデモに何度か参加したんです。今は私、反戦老人クラブという組織に参加しているんですけれども、当然ながら、老人ばっかりです。かつてのベ平連運動にしても、圧倒的に若者が参加していました。小田実も、吉川勇一も、鶴見俊輔も、おっさんが関わったんだけれども、でも、実際に動いていたのは学生というか、若い人。ところが、今、活動した発起人とかがどんどん死んでいく。ところが、若い人がそういう運動になかなか参加していないという現状、これを花崎先生なら、どういうふうに感じているか。それから、どうしたらいいのかなと、思ったりするんですね。世界で言ったら、例えばサンダースの話、グレタさんの話、若い人がかなり参加しますよね。ところが、日本では参加する人はいるけれども、層として大きな層になっていないということがあって、これはどうしたものかなという問題意識を持っています。

花崎：ちょっと見当違いかもしれないんですけれど、時勢、時の勢いという人の力ではどうにもならないものを感じたりするんですね。それは、ある時代にはその時代を動かす時勢があって、若者があの時代は立ち上がってデモに行くのが日常的なことだったんです。別に特別なことではなかったけれども、だんだん今日の時代になってくると、社会の仕組みというのか、構造というのか、そういうことが非常にできにくい構造が１つあるのと、それから忖度ということがはやったり、人の顔色を見るとか、どう見られるかというのが非常に気になるとか、そういう若い人たちがかわいそうだと私は思うんです。だけど、これがそのままずっと永久に続くのかというと、そうでもないだろうと。また若者が元気になる時代も必ず来るに違いない。これはただの希望的観測ですけれども、そう思って若者を否定しないようにしようかなと思っております。

番匠：花崎さん、今インターネットのほうでもちょっと似た質問が来ていまして、日本でいろんな抗議活動をするときに、礼儀正しくないと話を聞いてもらえないというのが多いんじゃないかと。対話って花崎さんもよく使われますけれども、怒っているイコール怒りに足る何か問題があるではなくて、怒りもコントロールできない駄目な人とレッテルを貼られて、怒りから対話がうまくつながらなくなっているんじゃないでしょうか。対話するには、主張するほうが常に礼儀正しくなけりゃいけないんでしょうかというコメントも来ています。対話の場の設定というんですか、ちょっと答えにくいかもしれないんですけれども。

花崎：そういう傾向は、最近の傾向ですね。昔は自由に怒りは怒りとしてぶつけても、それはそれでいいんだという。それから、今と違うのは、演説の文化みたいなのがあったんですね。人の前に出て演説する、自分の考えをとうとうと述べるという、そういうことが許されるし、それをみんなが聞くという文化もあって、これはアジアに行くと非常に強いですね。今でもインドとか、特に南アジア系の人たちには雄弁の文化みたいなのがあるわけです。どうしたら人に知らせることができるんだと。それは１つは、上手にスローガンめいた言葉で、耳に入りやすい言葉を繰り返しながら先へ進んでいくんですね。そういう語りかけて人に話を聞かせる、そういう力というのが今、日本の場合は特に弱くなっちゃっていますよね。強い主張をして、人に聞いてもらうということを怖がる、恐れるというか、そういう感じが非常にしますね。

番匠：公久ちゃん、何かありますか。

原田：さっきですけれども、差別がそんなにひどかったというのを知らなかったというか、そんなことがあるんかいなみたいな感じで、ノンノさんも今は時代が変わって、差別とかがあんまりなくなったみたいな話を一緒にしたんですけれども、だとすると、私がしゃべっていることって、うそなのかなと思っちゃうわけですよね。私って、あることをあったよって、ただしゃべっているだけなんだけれども、よく言われるのが、今は『ゴールデンカムイ』も流行っているし、アイヌが流行っているし、アイヌって今は差別とかされないんだよね、よかったねって。何だろう、この人の頭の中はお花畑なのかな、私の話を聞いた後によくそんな話できるなと思う人がいるんだけれども、私はあったことしかしゃべりません。一昨日、気持ち悪いと言われた人に、差別なんてあるんですかねと言うのはどうかしていると思いますので、差別は厳然としてありますし、ただそれを差別されて悲しいじゃなくて、そういうことをする人たちが世の中にいるんだけれども、これって問題ですよね。和人の方々が考えてくれませんかという私の主張は間違っていないと私は思っていますので、『ゴールデンカムイ』がはやっているし、アイヌは差別されないでしょうはやめてほしいです。厳然とありますので。それだけを言っておきたいので、マイクを取りました。ありがとうございました。

番匠：例えば京都でも、ウトロで放火事件がありました。ヘイトスピーチって新しい形の差別と言ってもいいですけれども、これまで見えなかったものがより見えなくなったり、逆にすごく見えやすくなったりするようなところがあると思います。特にインターネットの領域で、例えば大阪なんかでは元部落だった場所をカメラで撮って、紹介するユーチューブ動画がはやったり、北海道でもおかしな議員が藻岩山はアイヌの聖地じゃなかったという発言をしたり、声の大きな人を中心に何か少し差別の形が変わってきている感じはあります。見えにくくもあり、見えやすくもあるみたいな、そういう変化があるんじゃないかと思います。

花崎：原田公久枝さんの今日の話なんかは本当に氷山の一角というか、もっともっと差別はいっぱいあるんです。この人には差別の経験というのが。それと、差別と仕事に恵まれないとか、仕事場を与えられない、そういう職業差別と、それからそれに基づく貧困、貧しさ、というのを本当に嫌というほど聞いてみれば、よくそれなのに、いじけたり、曲がったりしないで、こんなふうになってきているなと。だから、非常に強い人格でもあると思うんですよね。

孫美幸（ソンミヘン）（文教大学国際学部教員）：５年ほど前に大阪大学でお話を伺って、公久枝さんとはしばらくや

り取りをさせてもらっていたんですけれども、お2人に1つずつ質問をしたいと思います。

まず、花崎先生がスピリチュアリティのことに最後触れられましたが、私もそこは引っかかっています。なぜかというと、研究でも実践でも、スピリチュアリティを大切にしていると言うと、社会運動とか、教育とか、いろんな分野の先生や実践されている方から、社会の構造の問題じゃなくて、心の問題にしていると言われます。私にとっては、自分の内の自然と外の自然は、ちょっとアイヌの考え方に近いかもしれないですけれども、すごく影響し合う大切な部分なんです。それをどう話し合っていったらいいのかが、自分にとってはネックなので、花崎先生のお考えを伺いたいなと思いました。

公久枝さんには、もしかして以前も同じことを聞いたかもしれないですが、自分はバックグラウンドが在日コリアンなので、同じように学校から依頼を受けて、代表みたいな形で話をしに行きます。最近自分も年をとって、先生方が若くなってきて、講演に行く前の先生たちとのやり取りの時に疲れるようになりました。そんな中で、もう1回「よし頑張ろう」と思ってまた学校に行く時の、自分への勇気づけ方というのは、公久枝さんはどうされているのかなと思って。何か若い世代の先生方とお話しするのが大変で。最近来た学校からの依頼は、「違う国の文化のことを知りたい」「外国から来た人たちの気持ちを知りたい」というものでした。私じゃなくていいかなとか思うんだけれども、「いや、ここは頑張ろう」と思いなおします。ただ、何回も重なると心が折れそうになります。公久枝さんが、さっき怒りに任せるじゃないですけれども、結構対等に高校生にもぶつけるじゃないですか。だから、自分の中での循環をどうしているのかなと思って。正直なところをお聞きしたいなと思いました。

花崎：スピリチュアリティというのは心の内面の衝動というか、思いのわけで、直接には政治とか、外部のところと結びつかない場合も多いと思うんですね、自分の中で対話するという内面の行為なので。だけど、それだけにとどまってしまうと、今度は、精神文化と精神世界とか、これが全部そっちへ行ってしまって、全然現実と関わらないというか、現実を超えて内面の世界に入り込んでしまうという、そうなってはまた話が逆だと思うんですね。だから、内面のことは内面のこととして重んじながら、しかし、政治とか文化とか、世界的なことをおろそかにしないという両方を考えるべきではないかと思います。

原田：私は、ノンノさんがこの社会でいうとまあまあ偉い人らしいと、会ったときは知らなかったし、その後はペンパルだったので、めちゃめちゃ対等なんです。けんかもするし。大体私が1人で勝手に怒っているだけで、ノンノさんは別に文句は言われない。それで小さい子供と一緒に遊ぶときがあるんだけれども、そのときには別に子供だからと侮ったりはしない。つまり、お年寄りだから、子供だから、男性だから、女性だからと差別すると、私自身がずっと差別されてきたのに、差別する人になっちゃうじゃない。だから、嫌なの。だから、高校生にも真正面から、「おまえら、何言ってんねん」と言うし、私が今知り得ていて、分かっていることをこの場に全部置いていってあげようと思って、毎回しゃべってる。というのは、ここにいる人たちはきっと、アイヌに会うのは私が最初で最後かもしれないのよね。で、代表で来ているつもりはないけれども、その方にとって私は、ただ1人のアイヌなわけです。ただ1人のアイヌが手を抜いてしゃべったら、アイヌ全体が、何だ、大したことないなと思われちゃうから、いつでも全身全霊で、私が知り得ている、私がしゃべれることは全部置いて帰ってやろうと思って、こういう講演に臨んでいるので、それが私のモチベーションとなっていると思います。つまりは、代表として来ちゃってるんだね。なので、代表と思って背負って生きているんだと思います、私たちは。それは私がそれを語ることを選んでしまった、公の人になったと自分で思ったときから、背負うべきことだと思っているので、自分で決めた道なので仕方ないと思います。

大川原拓真（同志社大学学部生）：スピリチュアリティにも関係するんですが、共生というものを考えていくうえで、内面世界みたいなものを理解すると

いうのが大事ではないかと思いました。衝撃をもってお聞きしたんですが、原田さんの差別経験のなかで、１つ、水準の違う差別経験があるなと思って、本当に衝撃だったんです。アイスクリームという言葉を見ると恐怖を感じるという、この経験をさらに踏み込んで理解していくことが、つまり原田さん自身の内面世界というか、内側から見えている世界を理解することで、共生というものを考えていく一歩になるのではないかということです。質問なんですが、内地でも、アイスクリームという言葉を見ると恐怖心みたいなものが出たりするのか、ということが気になりました。

原田：確かに、内地ではないです。

大川原：先ほど言ってたような本州だと、そういう北海道の企業の差別経験はないから、その安心感もあって、ないということなんですか。

原田：そうですね。こっちに来ると大体、フィリピンと間違えられるので、アイヌって指さして言われる北海道のような差別はありません。だから、こっちに来てアイスクリームののぼり見て、一瞬、あっと思うけれども、ああ、そうか、こっちは内地だから、ないなってすぐに思える。なので、もしかすると北海道限定かもしれないです。それは面白いので、何かの儀式のときに、みんなに聞いてみます。

花崎：私も北海道ですので、よく聞くんですよね。アイまで言われたら、あっ、アイヌじゃないかという、今、原田さんが言ったのは、原田さんの経験だけじゃなくて、アイヌの人たちの共通の経験として、北海道の場合はあると思います。

もう１つ、本州と違うのは、北海道にいる場合に、ちょっと言いにくいんですけれども、アイヌの人が毛深い。手足の毛が少し濃いという、それが非常な差別なんですね。東京に来ちゃうと、銭湯に行くのは嫌だと。見られるのは嫌だけれども、別にそれだから、アイヌと決められるようなことは少ないという。だから、東京のほうがよっぽど楽という、だから働くんだったら、東京に来て働きたい。そういう若いアイヌの人たちが、知っているだけでもかなり多かったですね。

番匠：今日は暑いなか北海道からお２人に来ていただいて本当にありがとうございます。最後に一言ずつ、短めに何かありますか。

原田：京都は楽しかったです。今日は妙心寺とか、いろいろご案内してもらって、めちゃめちゃ楽しかったので、ぜひまた呼んでください。

花崎：私は、一番最初に言いましたロシアとウクライナの戦争ですね。この問題がやっぱり一番気になって、一番何とかしなきゃならないけれども、もっと人のために何かできないかという、焦りというか、強い気持ちがありますから、それだけは最後に言いたかったです。

番匠：どうもありがとうございました。これは戦争と反戦という二極のなかで、自分の起点、立脚点をどこに定めたらいいのか、少数意見と言いますか、第三の意見というものの場所が定まらない、危うい時代だと思います。２人の経験、歩いた場所、出会った人、そういった話から、とにかくいろんな人と出会って話を聞いていくなかで、手づくりで何とかやっていくということが、多分、次の次の次ぐらいには、何かつながっていくんじゃないかという、何かそういう希望を持ってもいいんじゃないかと思います。短い時間でしたが、今日は「生きる場の思想」ということで、この場を共有していただいた皆さん、ありがとうございました。（拍手）

【注】

1）崔南龍『一枚の切符 あるハンセン病者のいのちの綴り方』みすず書房、2017年。